
恋のレッツダンス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のレッツダンス

【Nコード】

N2364J

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

いとしいあの娘がお目当てのパーティー。けれど相手にされな
いで。チェッカーズシリーズ第四十六弾、少し悲しい恋のお話です。

第一章

恋のレッツダンス

今日もあの娘が目当て。だからパーティーに出た。

髪のセットを決めて服もお洒落にして。そのうえで出て来た。

「よお」

「今日も決めてるな」

「当たり前だろ？」

少し冷やかしてきた仲間達に笑って答えてやった。

「何でわざわざここまで来たと思ってるんだよ」

「彼女が目当ててか？」

「あの娘が」

「そうさ」

仲間達にはつきりと言ってみせた。

「あの娘がいないとな。来ないさ」

「やれやれ、御前も物好きだよ」

「全く」

俺の今の言葉には肩をすかして言ってきたくれた。

「あんなガードの固い女の何処がいいんだよ」

「なあ」

「固ければ固いだけいいだろ？」

俺はまた仲間達に言っただけだった。

「純情ってわけだよ」

「あれは純情じゃないよな」

「なあ」

しかし皆それは否定した。しかもその中には言った俺も含まれていた。俺もわかっていてあえて今の言葉を言っただけだった。

「かなり遊んでるしな」

「先週はジョニーと」

「そして三日前はビルと一緒にいたよな」

「で、そのビルだけれどな」

ジョニーもビルも同じハイスクールの仲間だ。俺達は同じハイスクールの仲間ってわけだ。勿論俺が今狙っている彼女もだ。

「今日終わったってさ」

「おいおい、早いな」

「もうかよ」

皆ビルが今日彼女と別れたと聞いて呆れた声を出した。

「三日かよ」

「相変わらず移り気な女だよな」

「で、御前がか」

皆はここで俺にまた顔を向けてきてそのうえで言ってきた。

「今度は」

「一日もつか？」

「おいおい、随分言ってくれるな」

しかし俺はそんな言葉には惑わされなかった。

「俺が相手になつらな。ずっとだぜ」

「ずっとかよ」

「そうさ。教会から墓場までな」

わざと強気になって言ってやった。

「一緒だぜ。まあ見てなつて」

「それはないよな」

「ああ、絶対にな」

「それはない」

しかし皆はそれは全力で否定してきた。

「あの娘ならな。絶対にないな」

「あれだけ浮気性なのにな」

「浮気なんてのは女がするもんじゃねえんだよ」

俺は口元にわざと皮肉な笑みを浮かべてやった。

「男がするもんだよ。違うか？」

「じゃあ浮気されるよりするってか」

「しかも振られるより振るってか」

「そうさ」

また強気になって言っただけだ。

「その通りさ。俺が彼女を選んだんだよ」

「選んだねえ」

「何か随分と強気だな」

仲間達はそんな俺の言葉も冷ややかに返す。全く信じていないのは明らかだった。そんなわけねえだろ、ともう口元で言っていた。

「そうなればその為にパーティーを開いてやるさ」

「シャンパン用意してな」

「ああ、じゃあそれで頼むぜ」

俺はここでも不敵に返してやった。

第二章

「シャンパンな。一ダースな」

「一ダースかよ」

「また随分と派手に注文してくれるな」

「絶対にそうならないって思ってたんだろ？」

また言っただった。

「俺が彼女とそうはな」

「ああ、その通りさ」

「なる訳がねえさ」

「絶対にな」

皆もまた随分と自信たつぷりに返してくれた。

「あの娘だけはな。絶対に無理さ」

「ほら、言うだろ？」

そして一人が俺に言ってきた。

「恋は小鳥みたいなものだつてな」

「それってどういう意味だよ」

「移り気ってことさ」

そいつは俺にこう答えてきた。移り気だつて実際に。その言葉また俺にとつちやとても気に入らないものだった。内心少しばかり頭に来た。

「移り気な。特に女の子はそうさ」

「女はかよ」

「その中でもあの娘はな」

そしてその俺の意中の娘の話にもなった。

「すげえぜ。あれはよ」

「だから何度も言ってるだろ」

俺もあえて言い続けてやった。

「そんな手強いのを陥落させてやるってな」

「ホオジロザメを銛だけで倒すつてのかよ」

「無茶だぜ、それはよ」

「銛？そりゃ違うな」

俺はここでこの前観た映画のことを思い出した。確かジョーズって映画だ。鯨の奴が派手に暴れ回っていて随分と迫力があったのを覚えてる。

「俺は船に乗ってるんだよ」

「船かよ」

「鯨よりずつとばかりでかくて大砲まで持ってる船にな。乗ってるんだよ」

それが俺だつてことを。はっきりと言ってやった。

「だから御前等が心配することはねえよ」

「言うねえ。何処まで強きなんだよ」

「じゃあまあその船で進むんだな」

「ああ、ダンスは何時からだ？」

今度はダンスの時間を尋ねた。

「それでな」

「ああ、もうすぐだぜ」

「もうちよつとしたらだな」

仲間達はここでは親切に俺に教えてくれた。

「それまでどうするんだ？」

「彼女でも探すのか？」

「いや」

しかし俺はそれは断るのだった。

「今はな。探さないさ」

「あれっ、事前の用意とかしないのかよ」

「また何でだよ」

「もう用意はしたさ」

俺は今は表情を消して答えた。

「それはな。してあるさ」

「つていうともうプレゼントとか用意してあるのかよ」

「早いな」

「大砲には弾を込めておくもんだろ？」

これが俺の返答だった。

「だからだよ。もう用意してあるんだよ」

「大砲はもうあるのかよ」

「そうさ。これで仕留めるんだよ」

一応俺もそんなものは用意していたってわけだ。まさか何も用意しないで要塞に乗り込むつもりはなかった。流石にそんなに馬鹿じゃない。

「いざって時はな」

「そうかい、今の御前は將軍ってわけか」

「シャーマン將軍か？パットン將軍か？」

どいつもこいつもまた笑いながら俺に言ってきてくれた。

第三章

「どっちなんだ？それで」

「まあどっちでも戦車だけだな」

「じゃあパットンにしとくさ」

名前を聞いて何となくそっちの方が強そうだったのとガキの頃映画でパットン戦車軍団つてのがあったからそっちにした。何かえらく顔の怖いおっさんが出ていた。

「それじゃあな」

「おう、じゃあパットン將軍を」

「健闘を祈るぜ」

皆笑いながら俺に敬礼してみせてきた。

「いざ、アドルフ・ヒトラーが攻めてきているアルデンヌへ」

「戦車を飛ばすんだな」

「戦車もとつくに用意してるぜ」

俺はそっちも持っていた。切り札もだった。

「それもな。あるぜ」

「ほお、何でも持つてるんだな」

「まさにアメリカ軍だな」

俺達の国のその軍隊だ。とにかく金持ちで何でも持つてるってのはこの国が多く、多くの国から思われてることらしい。まあ自覚がないわけでもない。

「じゃあ大将閣下」

「いざ戦場へ」

「おうよ。戦利品はちゃんと持って帰って来るぜ」

俺は笑いながら言葉を返してやった。

「期待していなよ」

「戦果を待つてるからな」

「それじゃあな」

「ああ、それじゃあな」

こんな言葉を交えさせてそのうえで戦場に向かった。戦場じゃもう歩兵だの戦車兵だのが身構えていた。どいつもこいつも着飾ってお化粧してダンスがはじまるのを待っている。

皆テーブルの上のチョコレートやらドーナツやらハンバーガーやらを食べてジュースを飲んでいる。それが燃料ってことだった。

燃料を補給しながらそのうえでだった。俺もまた待っていた。

「さてと、それじゃあそろそろだな」

ダンスがはじまるのを待っていた。狙いのあの娘は部屋の中央にいた。

見事なブロンドをポニーテールにしている青い目がまるで湖みた이었다。晴れやかな笑顔でいて白い頬から紅の色まで見えていて唇も綺麗なスカーレットだった。白いみらびやかな肩の見えるドレスに赤い靴。それだけでもうダンスの場のプリマドンナだった。

その彼女に言い寄りそうな野郎も多い。けれどどいつもこいつも軽くあしらわれていた。けれど俺は違う。そつとあの娘の前に出て来て言っちゃった。

「レディ」

「何？ミスター」

まずはにやりと笑い合つてのやり取りからだった。

「今夜のプリマドンナに御願いがあんだけどよ」

「あら、それは何かしら」

「今夜のプリマドンナはあんただな」

「そう言ってくれるのね」

悪戯っぽく笑いながら俺の言葉に応えてきた。

「有り難う。御礼を言わせてもらっわ」

「御礼ついでに俺からの御願いがあなのさ」

「それは何かしら」

「プリマドンナにはプリマウオーモが必要だよな」

俺もまた悪戯っぽく笑いながら彼女に言っちゃった。

「ヒロインの相手役ってやつがさ」

「そしてそれは誰なのかしら」

俺の目を見て楽しそうに尋ねてきた。

「それは。誰だと言うの？」

「あんたの目の前にいるキザな奴さ」

俺が言った言葉はこれだった。

「そいつでどうだい？」

「そうね。見たところ鎧も見事に着てるし」

俺のそのファッションのことだった。

「それに見事な腕前みたいね」

「騎士になるようにはしてるさ」

今度は自分のことを騎士と言ってみせた。

「プリンセスを守る為にはな」

「じゃあ騎士殿にまた尋ねるけれど」

相手も乗ってきてくれた。内心しめたと思っていたがそれでも俺はまだ油断してはいなかった。何しろ相手が難攻不落なのはわかっていたからだ。

第四章

「その剣の腕前を本当に見せてもらいたいだよ、プリンセスは」

「じゃあもうすぐ見せようか？」

また言葉を返してやった。

「この場でな」

「乗ったわ」

これが俺の言葉に対する彼女の返事だった。

「その言葉。喜んでね」

「有り難いね。受けてくれるのかよ」

「ええ、気が向いたからね」

俺の方を見ながらまた言ってくれた。

「それじゃあ。今日のダンスの相手はね」

「俺で決まりだな」

「そうよ。さて」

話しているうちにだった。音楽がかかってきた。まずは伴奏だった。そこからダンスがはじまることはもうわかっていることだった。

「見せてやるぜ、俺の剣捌きをな」

「楽しみにしてるわ」

キャンドルライトの中でダンスがはじまった。それはチークダンスだった。俺も伊達にこの名うての浮気な娘に申し込んだわけじゃない。ダンスには自信がある。右に左にリズムよく。彼女の動きに合わせて音も忘れず踊ってみせた。俺は顔は笑っていたが内心真面目だった。

彼女のダンスもかなり上手い。それに合わせるのははつきり言って簡単じゃない。けれどそれでもやっていって。チークダンスの中で言ってみせた。

「今夜はこれで終わるかいい？」

「あら、その言葉って」

俺の今の言葉に応えて笑ってきた。

「何かあるのかしら」

「何かあったらどうするんだい？」

俺は余裕を含ませて問い返してやった。

「その場合は。どうするんだい？」

「聞きたいわ」

答えずに言ってきた。

「貴方が今どう考えているかね」

「騎士つてのは最後まで守るものだろ？」

言葉をその中に隠してみせた。

「最後までな。どうだい？」

「それは今夜って意味かしら」

悪戯っぽい笑みはここでも出て来た。

「今夜。どうかしらってことかしら」

「だとしたらどうするんだい？」

踊りながら一歩踏み出てやった。

「そうだとしたら。どうするんだい？」

「そうね」

俺の目を見て言ってきた。ダンスはそろそろクライマックスだ。そのクライマックスのダンスの中で俺は彼女の次の言葉を待っていた。

そしてその言葉は。これだった。

「今夜はね」

「今夜は？」

「いいわ」

こんな調子だった。

そして唇に小指を当てて出してみせた言葉は。

「明日ね」

「明日かよ」

「そうよ、また明日」

右目をウィンクさせて。また言ってきた。

「それでどうかしら、ダーリン」

「おやおや」

俺は内心を隠して笑ってやった。

「明日かよ」

「答えはそれまで待っていてね」

悪戯っぽい笑みはそのままだった。

「それでいいかしら」

「へっ、いいさ」

踊りはそのまま続けていた。

「それじゃあな。そういうことだな」

「ええ。それじゃあね」

結局この日はこれで終わりだった。俺の完敗ってわけだ。切り札を出すよりも前に敗北した。戦車での突撃はあえなく失敗に終わった。

「それで終わりだったんだな」

「そうさ」

仲間達と一緒に夜の街中でだべりながら話をした。場所はパブだ。勿論ハイスクールの連中は入っちゃいけない場所だがこっそりと入って大人のふりをしてカウンターでビールをやりながら話す。

店の中はかなりぼろぼろで木に年季があった。何か頑丈なだけが取り柄みたいな椅子に座ってテーブルにビールを置いて。それで皆と話をしていた。

「見事にな。今回は失敗さ」

「今回は、かよ」

「明日また仕掛けるさ」

言いながらビールを飲んで思い出したのはそのペンダントをしていた首元だった。白くて綺麗な首に銀のペンダントが映えている。そして何よりもその下の胸元のことを思い出した。

「またな」

「まあそうじゃなくちな」

「仮にもあんな娘をゲットするってんだからな」

「そうさ、やってやるぜ」

俺はまた言ってやった。

「何があってもな」

「そうそう、その意気ってな」

「頑張れよ」

仲間も笑顔で周りから励ましてくれた。

「明日もな。正面からな」

「ぶつかっていけよ」

「そうさ、明日もダンスパーティーだ」

俺も言葉を出してやる。

「明日こそな。陥落させてやるぜ」

今は涙はビールで流し込み取り乱しそうなまでに苦しい気持ちも流し込んでやった。ビールと仲間の言葉が何よりも嬉しかった。けれどそれは今夜までのことで明日また挑戦してやる、俺はそのことを固く誓いながら今は飲んだ。また明日仕掛けてやることを決めて

恋のレッツダンス 完

2009・6・15

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2364j/>

恋のレッツダンス

2010年10月8日15時13分発行